コラム 9-6　科学におけるアメリカ第一主義

トランプ前大統領の登場以来，アメリカ第一主義という表現がよく取り上げられますが，科学の世界では，以前からアメリカ第一主義がしばしば見られています。本書のパーソナリティ（性格）の章（Lecture 9）で紹介した 5 因子モデルは，代表的なパーソナリティ理論の 1 つに過ぎないのですが，アメリカの研究者たちの多くは数にものをいわせて，5 因子モデルが最も優れたパーソナリティ理論であり，その最終結論であるかのように主張しています。実は，心理学も含めて科学者の数はどの領域でもアメリカが一番多いため，アメリカの研究者が支持する考え方が主流となり，いつのまにか最も正しいものであるかのようにされてしまう傾向があります。

同じような例は，誰でもきいたことがある有名な化学物質アドレナリンです。アドレナリンは，日本人研究者が世界で最初に抽出に成功した物質のため，現在まで世界中でそのときの名称であるアドレナリンが使用されていますが，アメリカだけは，その直後に同様の物質を抽出したアメリカ人研究者が命名したエピネフリンという名前を使っています。同じ物質を 2 つの名前で呼ぶことがあるので，混乱したことがある人もいるのではないでしょうか。同じ物質を別の名前で呼ぶことは紛らわしいのですが，アメリカでは，この例に限らず，自国の研究者の成果を前面に出す「科学的帝国主義」が頻繁にみられます。

心理学の他の例では，クレッチマーが挙げられます。日本では，多くの心理学書で正しくその理論を紹介されていないという意味で不遇なクレッチマーですが，アメリカでは，別の形で不遇を被っています。

1940 年代に，シェルドンというアメリカの研究者が，クレッチマーの類型論の妥当性について，大学生を対象に確認しました。彼は，男子大学生の全身を前や横から写真撮影し，体型を客観的に数値化した上で，性格検査の結果と比較し，クレッチマーの理論と同じように性格検査の結果と体型に対応関係があることを確認しました。つまり，別の国で一般的な人（大学生）を対象としてもクレッチマーの理論の妥当性が確認されたということです。この結果は，現在の最新のアメリカの心理学のテキストにもシェルドンの研究として掲載されていますが，そこでは，その研究の基礎となったクレッチマーの名前や理論は一切触れられていません。